



祐介の目

No.97

大田祐介 (福山市議会議員)

しかし、時代は少子高齢社会となり多くの学校のプールは老朽化し、プールの維持管理費に年間3百万円かかるようになってきた。市内全小中学校でいえば2億8千万円である。この際、学校の

学校プールの将来

昭和30年5月、修学旅行生を乗せた宇高連絡船・紫雲丸の海難事故により百名の児童生徒が亡くなり、以来全国的に学校プールの建設が進み水泳の授業が行われるようになった。福山市内最初のプールは南小学校だったが、私が卒業した多治米小学校は日本鋼管製の鋼板を使ったプールであり、コンクリート製プールより立派だと校長が自慢していたのを覚えている。当時多治米の先輩・藤田康二さんは50m自由形の学童新記録を樹立したが、40年以上経た今でも破られていない。

昭和50年代に入るとスイミングスクールブームが到来し、市内にも多数の温水プールが建設され、一年中多くの子供達で賑わうようになった。各スイミングに選手コースが設けられ有力選手も育ち、平成の半ば頃まで福山の水泳界は大いに盛り上がった。

の水泳の授業は近隣のスイミングスクールに委託してはどうかと議会で提案している。スイミングも少子化によりシニア中心の運営に変わっている。スイミングのコーチの方が水泳指導は得意であろうし、安全管理にも長けているだろうから教職員の負担軽減も兼ねて一石二鳥ではないか。

公営プールも老朽化が著しく、竹ヶ端や丸の内プールもまもなく寿命が来る。そうすると50mプールはローズアリーナのみになるので、これを通年使用できるプールに変えるべきだろう。飛込プールにも屋根を付けて通年使用可能とすれば一層の競技力向上も期待できる。

学校プールでの水泳部の活動もスイミングに移管して選手育成をはかってはどうだろう。大阪市では「塾代助成事業」といって学習塾やスイミングの費用に対し月額上限1万円の補助制度がある。福山市にもこのような制度を検討するよう要望している。